

古事記における世界の生成とシャーマニズム

—「根堅州国」と「綿津見神宮」をめぐる

ア ン ダ ソ ヴ ァ マ ラ ル
ANDASSOVA Maral

1. 先行研究と本稿の位置づけ

西郷信綱は古事記神代に登場する世界を三重層構造としてとらえた。「根堅州国」は「黄泉国」と同様地下世界であるとしている。その根拠として、「根堅州国」の出口は「黄泉国」と同じ「黄泉比良坂」であることをあげている。だが、両者は地下という世界の二つの側面であり、その決定的な違いとはオホアナムヂが「根堅州国」において試練を受け、呪具を授けられ、地上にもどったという点であると述べる^①。

西郷信綱の古事記は内的構造を持つ作品であるという視点を継承している神野志隆光は古事記と日本書紀は別個な作品であることを論じ、作品論の視点から古事記の世界観をとらえている。神野志隆光は「高天原」と「葦原中国」は、〈アメ〉-〈クニ〉の二元的対立にあり、それに対して、「黄泉国」、「寝堅州国」、「綿津見神宮」は〈クニ〉の次元に属する「葦原中国」を取り囲む形で成り立っていると述べる。〈クニ〉の側の「黄泉国」、「根堅州国」、「綿津見神宮」は「葦原中国」と平面的につながっているとし、その根拠として以下の二点をあげている。第一、古事記の原文から地下へ下ったという記述がみられないこと、第二、原文において地下世界を思わせる表現がないことである^②。

両者の論の中では「根堅州国」という世界は固定化している。つまり、「根堅州国」は世界構造の中で一つの位置を占めている世界として位置づけられている。しかし、物語の展開に注目すると、世界はそれを体験する神の変貌によっ

て変わっていくことがみえてくる^③。本稿では、スサノヲの体験の側から見えてくる「根堅州国」及びホヲリの体験の側から見えてくる「綿津見神宮」について考察する。

2. スサノヲと「妣が国の根堅州国」

イザナキはスサノヲに「海原」の支配を委任するのだが、スサノヲはそれを統治することなく、泣くばかりだった。

次に（イザナキが）、建速湊左之男の命に詔らししく、「なが命は、海原を知らせ」と、事依さしき。

かれ、おのおの依さしたまひし命のまにまに知らしめす中に、速湊左之男の命、命さしし国を治めずて、八拳須、心前に至るまでに啼きいさちき。その泣く状は、青山は枯山なす泣き枯し、河海はことごと泣き乾しき。ここをもちて、悪しき神の音狭蠅なすみな満ち、万の物の妖ことごと発りき。かれ、伊耶那岐の大御神、速湊左之男の命に詔らししく、「何のゆゑにか、なが事依さしし国を治めずて哭きいさちる」

しかして答へ白ししく、「あは、妣が国の根堅州国に罷らむとおもふゆゑに哭く」

しかして、伊耶那岐の大御神、いたく忿怒りて詔らししく、「しからは、なはこの国に住むべからず」とのらして、すなはち神やらひにやらひたまひき
(古事記上巻)

この場面において「妣が国の根堅州国」という世界名が登場する。それについて以下のように解釈されている。

新潮社版の古事記では、「妣が国」は「黄泉国」を指し、「根堅州国」と表現しているのは、「地底の他界であることを読者に印象づけるため」と解されている^④。また、西郷信綱は「黄泉国」を地下世界と捉え、「根堅州国」、「妣が国」

も同じ地下世界であると述べる^⑤。

それに対して、神野志隆光は「黄泉国」と「根堅州国」は「異なる称号、異なる主宰神をもつ世界であり「根之堅州国」は「黄泉国」とは別な、ひとつの神話的世界として意味をもつ」とする^⑥。つまり、「根堅州国」を地下世界の一つの側面と捉える西郷信綱に対して、神野志隆光は「根堅州国」を「葦原中国」と平面的につながる世界としてとらえ、さらに「黄泉国」と異なる世界であるとしている。

だが、どちらの解釈も、この場面において「根堅州国」はどのような性格を持っているのかということに重点をおいているのではなく、「黄泉国」と「根堅州国」は古事記神代の世界構造の中でどのような位置を持っているのかを問題にしているのである。

それに対して、本論では物語の展開において「他界」が変貌していくという視点から考えていく。そこで、それぞれの場面において登場する「根堅州国」はその文脈の中でどのような意味を持っているのかに重点をおく。ここでスサノヲの行きたい場所としての「妣が国根の堅州国」はどのような場所なのか注目し、論を進めていきたい。

ここにおいて以下の点に注目する。スサノヲは「啼きいさちき」と描写されている点、及び「妣が国の根堅州国」の世界名は地の文ではなく、会話文（スサノヲの言葉）の中で登場する点である。

民俗学の視点から泣くことは異世界と交渉をする手段を意味するとされている^⑦。さらに、「根堅州国」という世界名は地の文ではなく、会話文に登場することに注目したい。世界名を発することは、その世界を呼び起こすことを意味する^⑧。

スサノヲは「泣」き、さらに「根堅州国」というようにその世界名を言葉に発することによって、「根堅州国」という世界を呼び起こしているとみることができる。イザナキの周りの世界は、スサノヲが呼び起こした異界、「根堅州国」へと変容しているとみることができる。こうしたスサノヲは異世界を顕在化さ

せる一人のシャーマンとして登場し、その泣く行為及び世界名を言葉に発する行為によって「根堅州国」という世界が生成するとみることができるのである。

3. オホアナムヂが向かう「根堅州国」

次に「根堅州国」という世界名が登場するのはオホアナムヂが「根堅州国」へ向かう場面である。

しかして、またその御祖哭きつつ求げば、見得るすなはち、その木を折きて取り出で活け、その子に告げて言らししく、「いましは、ここにあらばつひに八十神の為に滅ぼさえむ」とのらして、すなはち木の国の大屋毗古の神の御所に違へ遣りたまひき。しかして、八十神覺ぎ追ひ臻りて、矢刺し乞ふ時に、木の俣より漏き逃がして云らししく、「須佐能男の命の坐す根の堅州国に参向ふべし。必ずその大神議りたまはむ」 (古事記上巻)

オホアナムヂが「根堅州国」を訪問し、そこで試練を受け、ふたたび地上世界に戻ってくるとオホクニヌシとなり、国作りをする。こうした物語は通過儀礼（イニシエーション）を経て、王へと成長することを意味すると説かれている⁹⁾。オホアナムヂは「根堅州国」を体験するシャーマンとして捉えられる。

「根堅州国」という世界名は地の文ではなく、神の言葉の中で登場することは注目すべきであろう。オホヤビコの言葉が行き先を明示していると同時に、異世界へ渡っているオホアナムヂを守護する呪術的な働きをする言葉でもある。オホヤビコはオホアナムヂを異世界へと案内する守護霊の役割を果たしている¹⁰⁾。

この場面において、「根堅州国」は地上世界の王になっていくオホクニヌシをサポートする世界として描かれている¹¹⁾。「根堅州国」は「青山は枯山なす泣き枯し、河海はことごと泣き乾しき。ここをもちて、悪しき神の音狭蠅なすみな満ち、万の物の妖ことごと発りき」というように描かれる、スサノヲが顕在化させた世界から、オホアナムヂのイニシエーションの場となる世界へと変貌す

る。オホクニヌシの地上世界の支配をバックアップする世界へと変わっていくのである¹²⁾。

4. 「綿津見神宮」

「綿津見神宮」はホヤリが亡くした釣り針を探しにいく世界として登場する。

しかして、塩椎の神の云ひしく、「あれ、いまし命のために善き議せむ」といひて、すなはち間なし勝間の小船を造り、その船に載せて教へて曰ひしく、「あれ、その船を押し流さば、ややまし往でませ。味御路あらむ。すなはちその道に乗りて往でましなば、魚鱗なす造れる宮室、それ綿津見の神の宮ぞ。その神の御門に到りましなば、傍の井の上に、ゆつ香木あらむ。かれ、その木の上に坐さば、その海の神の女、見て相議らむぞ」。

(古事記上巻)

ホヤリは「無なし勝間の小船」に乗って「綿津見神宮」にわたっていくことは興味深い。西郷信綱は、「無なし勝間の小船」の「マナシ」は目がないという意味で、眠っている間に海底の異郷へ達することを比喩的に表現しているとし、眠りあるいは夢とはこの世と次元の違う異郷へ渡る通路であると述べる¹³⁾。

さらに、民俗学の視点から船とは霊的な存在であり、鳥と同じく天空を飛翔するという性能を持っているとされている¹⁴⁾。このことから、ホヤリが船に乗っていくという表現は、ホヤリがこの世界と異界との境目を越え、「綿津見神宮」へと移行することが象徴的に描かれていると見ることができる。

さらに、シホツチの役割に注目してみたい。ホヤリが海辺に泣いているときにシホツチがあらわれ、「綿津見神宮」への行き方を教え、また、「綿津見神宮」を具体的に描写し、そこへついたらホヤリは桂木を見るところまで教えてくれたのである。ホヤリがその言葉に従って行くと「かれ、教のまにまに少し行でまししに、つぶさにその言のごとし」とある。

このことから、ここにおけるシホツチの役割は「葦原中国」と「綿津見神宮」の仲介役をつとめることであり、ホヲリが異世界へと渡っていく中で守護霊のような役割を果たしていると理解できる¹⁵。

ホヲリは「綿津見神宮」から帰還し、兄のホデリを屈服させる。「高千穂の宮」にいるアマツヒダカヒコホホデミとして描かれる。アマツヒダカと呼ばれることは天皇の正統な系譜に属することを意味する¹⁶。つまり、「綿津見神宮」を訪問した体験を通して、ホヲリははじめて天皇としての資格を手に入れたのである。

こうしたホヲリがイニシエーションを行う場所として「綿津見神宮」を位置づけることができる。

しかし、「綿津見神宮」という「異界」が持つ意義も変化していく。「綿津見神宮」から地上世界に戻ったホヲリのもとにトヨタマビメが訪れ、妊娠したことを告げる。

かれ、産殿に入りましき。しかして、方に産みたまはむとする時に、その日子に白して言らししく、「すべて侘国の人は、産む時に臨れば、本つ国の形もちて産生むぞ。かれ、あれ、今本の身もちて産まむとす。願はくば、あをな見たまひそ」

ここにその言を奇しと思ほして、その方に産みたまふをひそかに伺ひたまへば、八尋わにに化りて、匍匐ひ委蛇ひき。すなはち、見驚き畏みて逃げ退きましき。しかして、豊玉毗売の命、その伺ひ見たまひし事を知らして、心恥しとおもほして、すなはちその御子を生み置きて、白ししく、

「あれ、恒は海つ道を通して往来はむとおもひき。しかれども、あが形を伺ひ見たまひし、これいと忤し」とまをして、すなはち海坂を塞へて返り入りましき。
(古事記上巻)

トヨタマビメは産む時は「本つ国」の姿に戻るため、ホヲリに「見るな」の

タブーをかける。しかし、ホヲリはその姿をひそかに覗き、それは「八尋わに」だったことがわかる。トヨタマビメは「本つ国」、つまり「綿津見神宮」の姿で子供を産むと描写されていることは興味深い。ホヲリは「綿津見神宮」にいた時はトヨタマビメの「本つ国」の姿を見ていたはずで、それが「八尋わに」であることに気が付いていなかった。しかし、出産時の「本つ国の形」を見て、「見驚き畏みて」、はじめてトヨタマビメはホヲリとは異なる存在、異類であることを発見する。このことは、ホヲリにとっての「綿津見神宮」という世界が持つ意義が変容していることを意味する。

恥をかかされたトヨタマビメは産んだ子供を残して、「あれ、恒は海つ道を通して往来はむとおもひき。しかれども、あが形を伺ひ見たまひし、これいと作し」といい、海坂を塞げてしまう。それによって地上世界と「綿津見神宮」は往来不可能な世界へと変わっていく^{①⑦}。

西郷信綱によって「綿津見神宮」は三重世界構造の中で地下世界の一部としてとらえられていた。しかし、ホヲリのシャーマニックな体験の側から見ると、「綿津見神宮」はホヲリがそこに赴くことによって生成する世界であり、さらに、その体験によって変貌していることが見えてきたのである。

古事記神代の中で登場する世界は一つの世界構造としてあらかじめ物語の中で設定されているのではなく、その世界と接する神のシャーマニックな体験によって生成し、さらにその神の成長によって新たな意味に満たされていく世界として描かれているのである。

【注】

① 西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 一九六七

② 神野志隆光『古事記の世界観』吉川弘文館 一九八六

③ 世界の変貌はその世界を担う神の変貌によって実現される。「変貌」を見ていく研究方法は中世神話論の発想を踏まえている。「中世神話論」とは神話を考える一つの方法であると位置づけることができる。神話は古代のものであるということに価値をおいていた従来の研究に対して、神話とは常に変容し、時代を問わず生成することに価値を与えている。「中世神話論」は以下の研究に代表される。伊藤正義「中世日本紀の輪郭——太平記における卜部兼俱員説をめぐって——」『文学』一九七二年一〇月 第四〇号、山本ひろ子『中世神話』（岩波書店 一九九八）、斎藤英喜『荒ぶるスサノヲ、七

変化——「中世神話」の世界」（吉川弘文館 二〇一二）『古事記』の神話世界のなかで「神の変貌」を読み解いている斎藤英喜『古事記 成長する神々』（ビイング・ネット・プレス 二〇一〇）もあげられる。

- ④『古事記』（新潮日本古典集成）西宮一民校注 新潮社 二〇〇五（初版 一九七九）
- ⑤西郷信綱『古事記注釈』筑摩書房 二〇〇五（初版平凡社 一九七五—一九八九）
- ⑥神野志隆光『古事記の世界観』吉川弘文館 一九八六
- ⑦山田永「泣くことの古代的な意義」『古事記スサノヲの研究』新典社 二〇〇一
- ⑧アンダソヴァ マラル「古事記におけるシャーマニズム——「葦原中国」と命名することについて」『日本文学』二〇一五年五月
- ⑨西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 一九六七
- ⑩M. エリアーデ『シャーマニズム：古代的エクスタシー技術』、筑摩書房〈ちくま学芸文庫 上・下〉、二〇〇四年（初版冬樹社、一九七四年）まだ、シャーマンとなっていない者がイニシエーションを行う際、「他界」を訪問する。はじめて、他界を訪問することは危険なことであり、それ導く存在として補助霊が登場することは明らかにされている。
- ⑪西郷信綱『古事記の世界』岩波書店 一九六七
- ⑫斎藤英喜『古事記 成長する神々』ビイング・ネット・プレス 二〇一〇
- ⑬西郷信綱『古事記注釈』ちくま学芸文庫 二〇〇五（初版 平凡社 一九七五—一九八九）
- ⑭西村亨「鳥のあそび考——古代鎮魂の一考察」『日本神話研究 三』学生社 一九九七。西村亨によると古代生活における船は交通の用具とともに、霊的な存在としてとらえられていたという。古事記では「鳥之石楠船神」またの名を「天鳥船」という神名を伝えているように、船は鳥と同じく天空を飛翔するという性能を持っていると考えられていたのである。
- ⑮アンダソヴァ マラル『古事記 変貌する世界——構造論的分析批判』ミネルヴァ書房 二〇一四
- ⑯梅田徹「日向三代におけるヒコホホデミ——ワタツミの宮訪問条の主題と構想」『古事記の現在』神野志隆光編者 笠間書院 一九九九
- ⑰アンダソヴァ マラル『古事記 変貌する世界——構造論的分析批判』ミネルヴァ書房 二〇一四

* 討論要旨

乾善彦氏は、「根堅州国」が場面ごとに異なる世界として語られることについて、世界自体が変容しているのではなく、一つの世界の別の側面を語っていると捉えることもできるのではないかと指摘した。発表者は、『古事記』においてはあらかじめ固定化された世界が存在せず、その世界を体験する神が成長するにつれて世界自体が変化していく、という自らの立場を改めて主張した。また、その根拠については今後さらに考察を深めていきたい、と回答した。

津田博幸氏は、「根堅州国」という世界を名指す言葉が必ず神の口から発せられる、という発表者の指摘が、『古事記』の表現のあり方を考えるうえで重要なものである、と発言した。ただし、たとえば『古事記』冒頭の「高天原に成れる神の名は」における「高天原」という名は地の文のなかで言及されており、こうした事例を含めて、より包括的に考察する必要がある、と指摘した。発表者は、「根堅州国」と「綿津見神宮」に関しては、必ず会話文のなかで言及されるが、その他の名は地の文のなかで言及される場合と会話文のなかで言及される場合があるため、今後の課題として考えていきたい、と回答した。